

神への全き信頼

コリントの信徒への手紙Ⅱ一章8～14節

私たちは、……生きる望みさえ失い、私たちとしては死の宣告を受けた思いでした。それで、自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにするようになりました。(8、9)

信仰者パウロでさえ、生きる望みを失い、死を覚悟するような時があったと振り返ります。絶望するしかないときに、神は一方的にパウロを憐れみ、救い出してくださいました。大きな苦難の中では、自分自身への信頼はもろくも崩れ去り、私たちは絶望するしかありません。けれどもそのとき初めて、「自分を頼りにすることなく、死者を復活させてくださる神を頼りにする」に至るのです。神だけが、私たちをあらゆる苦難の中にいるときにも救い出すことができるお方です。絶望するような苦しみを通して、自分に信頼するのではなく、神にのみ信頼すべきことをパウロは改めて教えられました。耐えられないほど圧迫されて、生きる望みを失いかけている人はいるでしょうか。自分自身を頼みとしないで、死者を復活させてくださる神を頼みとしようではありませんか。